

令和2年度第1回奈良市総合教育会議 会議録		
開催日時	令和2年8月26日(水) 午前10時から午前11時まで	
開催場所	奈良市役所中央棟地下1階 地下会議室	
協議題	奈良市教育大綱について テーマ1 「奈良市としてどのような子どもを育てていくのか」 テーマ2 「今後の教育における教員の役割」 「今後の子どもたちの学び方」	
出席者	構成員	仲川市長、北谷教育長、都築教育委員、畑中教育委員、柳澤教育委員、梅田教育委員
	事務局	【総合政策部】真銅総合政策部長、谷田総合政策課長 【教育部】立石部長、増田次長、廣岡次長、吉田教育監、石原センター所長、山田教職員課長、伊東学校教育課長、垣見教育支援・相談課長 【教育政策課】小林課長、五味原課長補佐、小林主任、岡田指導主事
開催形態	公開(傍聴人2名)	
担当課	教育部 教育政策課、総合政策部 総合政策課	
議 事 の 内 容		
仲川市長	*本市では、主に教育分野について、その目標や方針を示した大綱を策定しています。現行の教育大綱は平成27年に策定し、第4次総合計画後期基本計画と計画期間を合わせる形で令和2年度までの計画期間となっている。令和3年度からの教育大綱は11月頃を目途に策定していきたいと考えている。何かご意見やご質問を賜りたい。	
北谷教育長	*教育委員会と市長については、これまでも協議をしながら、また、情報交換を密にしてきたところである。教育大綱を受けて教育施策をしっかりと考えていきたい。	
仲川市長	*教育大綱の方針については、資料「教育大綱の策定について(案)」の2ページ以降に記載している。これからの教育については、これまでの教育委員会の中でも十分議論をしていると聞いている。この総合教育会議は、私と教育委員の皆さんとの協議の場であるので、大きな柱建てについて議論をしていきたいと考えている。 *まず、一点目として、「奈良市としてどのような子どもを育てていくのか」ということについて議論したい。委員のみなさまから意見をいただけたらと思っている。	
都築委員	*予測するのが難しい社会が到来しても幸せに自分の人生を生きていく力を持った人に育ってほしい。幸せな人生を生きるとは、時代の変化や困難にも主体的に向き合って自分の可能性を発揮でき、それがより良い社会作りに少しでも役に立つという生き方ができる子どもだと思う。主体的に生きていく上で大切なことは自己への信頼、自己肯定感だと思う。 *学校教育が直面する課題として子どもたちの多様化が挙げられている。特別支援が必要な子ども、外国人児童生徒の増加、相対的貧困状態にある子どもの増加、性的マイノリティやいじめ、不登校、自殺者の増加等に対して、一人一人に寄り添った教育が自己肯定感を育むことにつながると思う。自分は大切な存在であると自己認	

識することは育っていく上での根幹になる。このことは家庭、学校、社会が協力し育んでいく必要があると考えている。また、自分を大切だと思えることは他者理解、多様性の理解に繋がると思う。そのことがあって初めて他者と協働して未来を切り拓いていく、そしてよりよい社会を共に築いていくことに繋がると思う。まとめると、自分を大切に、主体的に生きる力を持った子、他者や多様性を理解して協働してよりよい社会を作っていこうと考える子である。

柳澤委員

*子どもたちが意欲を持って自分で学ぶということが必要になる。それは、自主的な学びと協同的な学び、言い換えると対話的な学びが柱になってくると思う。それには、教員の働きかけが大事になり、従前は教えることが役割になっていたが、今後は、ファシリテーター、バックアップして支えていく支援者としての役割が重要になってくると思う。また、奈良は伝統的な文化の中心でもあって、その歴史を積み重ねてきた。歴史と文化を視野に入れて学校の中で作り上げていければよいと思う。

畑中委員

*自分の子どもも社会に出ていく年齢になったが、我々保護者が体感したことのない時代が到来しており、「私にはこれができる」といった個性を持った子どもを育てていくことが大事になってくる。子ども特有の興味心を持つことや熱中することを大事にし、そういったことを取り組める環境を作ってあげることも大事になってくる。子どもの時に培った集中力というのは、大人になっても通じる力になる。将来的には自分の好きが社会に生かせるようになってほしい。

梅田委員

*予測困難な社会や一人一人の生き方が多様化していくことについてはこれまでも議論してきたが、今回新型コロナウイルスへの対応がより加速度的に変化のスピードが増したのではないかと思う。保護者も子どもも教員も社会が大きく変わっていくことを実感し、それに対する期待と不安を抱きながら生活している状況ではないかと思う。そのような中で、子どもたちには自分にしっかりと自信を持つこと、自分で課題を見つけ諦めることなく解決していく力が求められていくのだと思う。多様な人と関わりながら、自分が未来を創るのだと考えて、行動していく子どもを育てていくことが求められていると思う。

北谷教育長

*4年前に一条高校の校長として着任していただいた藤原先生が「この世の中が10年、20年で大きく時代が変わってしまう。」と話されていた。その中でタブレットを使用した授業も進めてきたところである。それが今回の新型コロナウイルスにより3年、5年後先の世の中に近づいたような気がしている。混迷な正解のない世の中を生きていくためにはユニークな専門性を持った子どもを育てないといけないとおっしゃっていた。この度のオンライン授業による感想をある親から聞くと、Youtubeで外国から配信されている英語を聞いたり、英語のニュースを見たりと、さらに学びたいという気持ちを自由に広げているようであった。このように自分の興味関心をとことん深めていくような学びが求められているのではないかと思う。

仲川市長

* 皆様から頂いたご意見は、共通する内容であったと思う。世の中をどうより良くしていくか、どうより良く生きていくのかを大きな目的とし、学校現場に求められることが激しく変化している中で、大切なポイントの指摘をいただいたように思う。私も皆様の切り口に共感している。一方で現状の学校現場、既存の教育の仕組みが存在しており、今から新しい施策を始めるのではなく、既存のものをどう引き継ぎ、調和をし進めていくかが難しいように思っている。とくに「教育における教員の役割」や「子どもたちの学び方」についても大きく変わっていくのだと感じている。そのことについては、2つ目のテーマとして皆さんから意見をいただきたい。まずは事務局から資料の説明をしていただきます。

(事務局からテーマ2「今後の教育における教員の役割」「今後の子どもたちの学び方」について説明を行う。)

仲川市長

* 事務局から資料をもとに中央教育審議会の動きについて説明がありました。奈良市がこれまで取り組んできた方向性は大きく違わないように思いますが、実践的な部分については具体的に対応していく必要があると思う。国の直近の方向性を念頭に置きながら「今後の教育における教員の役割」や「子どもたちの学び方」についてご意見をいただきたく思う。

都築委員

* アンケート結果からも分かるように「基礎学力の定着」を大切に考えているように思う。可能性を広げていくためにも ICT を活用した個別最適化した教育は非常に大事になってくると思う。先日、一条高等学校の探究学習の視察に伺ったが、この授業は理系文系 2 人一組の教員で行われており、子どもたちの様子をよくみてファシリテーターの役割を担っていた。授業作りにおいて、非常に時間をかけられたと伺った。オンラインで互いの意見を言い合い、何日もかけて授業を作り上げた。他者と共に問題を発見し、課題解決に向けて取り組む協同的な学びを教員自身がされているのだと感じた。多様な視点で教師自らが新しい形の授業を作っていくというのは、基礎学力の定着とともに子どもたちの興味関心を広げていくためにも大事である。また、教師自らも学び続けることは大事である。

* 学びに向かう力をつけるには、大人になっても好奇心を持ち続けられるような力をつけるような授業を行うことが教員に求められる。これまでのように一人の教員が一つのクラスを教えるのではなく複数の教員が、また、教科担任制のように専門性を持った教員がより深い学びを教えることも必要になってくる。先々の子どもたちの可能性を広げていくためには基礎学力と様々な体験も大事だと思う。また、奈良で学ぶことの意義を感じながら成長してほしい。

柳澤委員

* ICT 教育の導入により、これまでのアナログ的な教育からデジタル的な教育にシフトしていくような中間点にあって、転換しなければならないということではないが、中教審答申の中間報告でもハイブリッド型としての対面指導とオンライン教育とを使いこなすということを提案しているように感じた。ただ、教員自身は非対面型の

授業にまだ戸惑いを感じているように思う。もう一度教員の役割を再定義するプロセスが必要になってくる。ICTに関して言うと、学校単位でチームリーダーを作って全体に広げていくのが望ましいと思う。

*教員アンケートについて、教員自身が ICT を活用した授業に自信、意欲があるかなにかについても丁寧に引き出すことが必要になってくる。

畑中委員

*学校現場における ICT の活用は、教員にとっても得意不得意が出てくると思うが、このことは保護者にとっても心配するところである。教員一人にできることは限られているので、教員の個の力が最大限に発揮できるような仕組み作りが必要である。先生に求められている役割は、子どもの可能性や資質を花開かせていくことである。子どもたちが置かれている環境は複雑であるが、子どもの未来が環境に左右されることのないようにしてほしい。学ぶ喜びを教えることは先生にしかできないものだと思う。

*先日視察した一条高等学校の探究学習のように教員と生徒と一緒に納得解を創り出していくような授業であったり、教員が自ら興味を持って学んでいる姿を生徒に見せることが好奇心を持たせることにも繋がるように思う。学ぶ喜びを教えることは AI にはできないことであり、教員が自由に教えることができる環境づくりを作ること今後必要になってくる。このようなことは保護者や地域の協力は欠かせないものだと思う。

梅田委員

*コロナ禍で行ったオンライン授業を通じて、その必要性を教員だけでなく保護者も実感したように思う。ICT 教育の導入によりベテラン教員だけではなく、若手教員が積極的に取り組んでいる様子が学校現場で見られた。これまでの黒板とチョークを使用した授業に戻るのではなく、ICT 活用への移行をスピード感を持って行うことが必要になる。

*オンラインと対面授業や実技、部活動といったオフラインの今までの価値観を組み合わせることが必要である。オフラインの部分が学校の存在価値ともいえることである。そこが、ハイブリッドな学び方に変わっていくのと思う。教員がこれまでになかった役割の実現に向けて、どう対応していくのか考えたときに、従来のベテラン教員が若手教員に指導技術を継承していく方法だけでは不十分であり、若手教員が核となって ICT スキルを身に付け、新しいことに挑戦することも必要になってくる。

*奈良市の教員研修においても、集合型研修からベテラン教員が若手教員に個別指導する個別訪問型研修も行っているが、もう一段階発想の転換を行う必要があるように思う。新型コロナウイルスの対応のように困難に立ち向かうために子どものサポートをどのように行うのかベテラン教員と若手教員がチームとなり協働している姿がみられた。そういうことを引き出しながらこれから求められるハイブリッドな学びを実現していくことが必要になると思う。

北谷教育長

*柳澤委員からも指摘があった教員アンケートについて、令和 2 年度第 1 回総合教育

会議資料 19 ページの「ケ Q. 学びたいこと」の④学校での ICT 機器の活用法に関することは、5 年前に実施したアンケートでも同じような質問をしているので、変化が分かるような示し方をしていきたい。

* 個別最適化した教育である「学びなら」も進めてきたところである。その中で教員の指導方法がどう変わってきているのかも経年比較できるようにしたい。

* また、「ク Q. 今後奈良市はどのような教育に重点を置くべきか」の⑥キャリア教育については、今後も引き続き行っていきたいと思っているが学校現場の実情を見極めてやっていく必要があると思う。

* ICT を活用できる教員に差があるのが実情であり、今後はデータを駆使し分析できるような教員を育てていかないといけない。今までの経験の蓄積とデータ分析とを子ども達の指導と評価に適切に繋げなくてはならない。また、対面型授業においては、子どもの様子を見て自律的な学びに結びつけるように教員がサポートしながら子どもの学びを深めていくような姿が重要になってくる。

仲川市長

* どのような子どもを育てるかについては、各委員共通軸が見えた。教員の役割については、現状も頭の片隅に置きながらということもあり、少し苦しさも垣間見える意見も多かったと思う。アンケート結果からも教員の意識と実態がみえた。

* 教育大綱について、奈良市の目指す教育に教員の在り方や生涯学習等、細かい部分をどこまで反映させるのかについて意見をいただきたい。先ほどの議論の中でも「どのような子どもを育てるか」については、具体的な手法も含めてイメージを持っていただいたが、教員の在り方については、県の所管する部分にも踏み込んでいくので、そこに踏み込むと個性のない教育大綱になってしまうのではないかと思う。そういった要素を入れていくのかどうかについてご意見を伺いたい。

柳澤委員

* 中教審の中間報告の中においても伝統的な学校、教室にいる教師の役割が否定されているわけではないと思う。ICT がなければ教室で行われる授業が成り立たないというわけではなく、多様な教師像を求めるかどうかだと思う。画一的に ICT の授業ができないのはおかしいのではないかというのではなく、30 人、40 人の子ども達の間を見れば分かるという考え方も成り立つ感性の部分が入ってくるが、それを大事にしつつ、新たな教育手法、学びのスタイルの発展形として ICT スキルはベースになると思う。流行から不易にシフトするものはなにか考えないといけない時期でもある。既存の教師と ICT スキルを持った教員とが共存するような形で行っていければいいのではないかと感じた。

仲川市長

* 子ども達には多様性を求めながら教員には一律のスキルを求めるのというのは果たしていいのか、ここが一つの命題になると思う。変える所、変えない所のメリハリが大切になるとのご意見であったが、他にもご意見を聞かせていただきたい。

梅田委員

* 教員の力を育てる研修について、奈良市は中核市であり研修権を持っていることからその位置付けやあり方についての視点であれば十分に議論ができるのではない

かと思う。

- 仲川市長 *例えば、目指すべき方向性は教育大綱で示しながら、それをどのように実現していくかという部分に現場の自治、裁量をどこまで与えるべきかということは検討の余地があるのではないかと思う。目指す教育の型をはめてしまうことが現場の教員の距離感、負担感が先だってしまうと良いものであっても前向きに取り組めないといった壁がでてくるのではないかという懸念もある。
- 都築委員 *教師がどういうあり方なのか外に見えづらく、保護者も知るべきである。教師の在り方を理解しようとするような環境づくりを行うことも大事であると思う。
- 仲川市長 *教育大綱の中で教員の守備範囲を示すことが、教員の助けになる可能性もあるが一方で地域からはもっと地域にでていくべきだといく意見が挙がってくるかもしれないが、ここをどう示していくのかポイントになる。
- 畑中委員 *教員の在り方については、働き方改革と密接な関係にあると思うが、教員アンケートを見てるとまだまだやりたいと思うことがあっても時間がなく実現していないのではないかと思う。教育大綱の中で教員の役割をある程度明確化していくことも今後大事になってくると思う。
- 北谷教育長 *求める子ども像の中では、教師の役割は非常に大事になってくる。そこには ICT 教育により子どもの学びをサポートし、教員の働き方も改革できるということであったが、5年前のアンケートでも教師の役割について見直しを行った。具体的には、部活動について積極的に外部指導者を入れることも行った。今回においても ICT 教育を進めるにあたり何をやって、何をやめるのか現場の意見を聞きながら議論していく必要がある。